発掘調査の概要

高松塚古墳（飛鳥藤原第137次）

平成16年10月から、特別史跡高松塚の発掘調査を実施しています。この調査は、「国宝高松塚古墳壁画」の恒久保存対策の一環として、墳丘の現況が壁画の保存にどう影響を及ぼしているのか、また古墳築造当初の墳丘の規模や形態、構造の解明を目的としたものです。調査は、文化庁の委託を受けた奈良文化財研究所が、奈良県教育委員会（橿原考古学研究所）、明日香村教育委員会と共同で、平成17年3月までの予定で実施します。

高松塚古墳壁画は昭和47年に発見され、飛鳥ブームや考古学ブームをひきおこしました。この貴重な壁画を発見時の姿で保存するために、昭和51年に保存施設が完成しました。それから30年近くが経過した現在、壁画の経年変化による劣化が社会問題化しています。最新の科学技術や学術成果を駆使した壁画の保存対策の策定が急務ですが、そのためには墳丘の現況把握と、再整備に向けた学術データの収集が欠かせません。

高松塚はこれまで径18m、高さ約5mの円墳と推定されてきましたが、その規模や形状は必ずしも確定したものではなく、近くにある中尾山古墳のように、八角形墳になる可能性もあります。

発掘調査は、壁画の保存に悪影響を与えぬよう、慎重な配慮のもとにおこなわれています。降雨時の雨水の浸透を防ぎ、直射日光による乾燥や温度上昇を抑制するために、墳丘部をすっぽり覆う巨大な仮設覆屋を建設しました。覆屋内部の調査は、雨天でも調査が可能なため、調査員はやや疲労気味ですが、連日訪れる多数の観光客に見守られながら、調査は順調に進んでいます。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　松村　恵司）

墳丘部の発掘調査風景

豊浦寺の調査（飛鳥藤原第133－9次）

592年に推古天皇が即位した豊浦宮（とゆらのみや）は、飛鳥時代の始まりを告げる宮殿として有名です。彼女は603年に小墾田宮（おはりだのみや）へ移り、その後、豊浦宮の跡地を寺にしたと伝えるのが豊浦寺（とゆらでら）です。僧寺である飛鳥寺に対し、尼寺として知られていますが、飛鳥寺と同じく、造営者は蘇我氏でしょう。現在の向原寺（こうげんじ）の境内が古代の豊浦寺の講堂にあたり、今回、納骨堂建設に伴って、13㎡を発掘しました。

厚い盛土のため、ごく狭い幅しか深く掘り下げられませんでしたが、予想どおり講堂基壇の硬い版築層を検出し、さらにその下には、地表下1.7mの深さで砂利敷が広がることを確認しました。

過去、向原寺の境内では、1985年に講堂の南端を調査しており、基壇の下からは豊浦宮の一部とみられる掘立柱建物も見つかっています。これらの成果をあわせると、講堂基壇の南北規模は23m前後になりそうです。砂利敷は、豊浦宮の建物の周囲に施された舗装と思われます。一帯に、豊浦寺と下層の豊浦宮の遺構が良好な状態で残っていることを確認した意義は大きいといえるでしょう。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　小澤　毅）

藤原宮朝堂院東第六堂（飛鳥藤原第136次）

藤原宮朝堂院地区の第8回目の発掘調査です。南北約12m・東西約50mに及ぶ東第六堂の全容解明を目標に、まずは東半分の発掘区を設けました。とても遺構の残りがよく、成果が期待できそうです。

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部　市　大樹）

藤原宮朝堂院東第六堂の発掘現場（西から）